

備陽史探訪

第 97 号

発行

備陽史探訪の会

福山市多治米町5-19-8

TEL(0849)53-6157

二〇周年を迎えて

会長 田口 義之

今を去ること二〇年前の或る日、五名の若者が、山の中腹に建つ家を訪ねるため、息を切らしながら坂道を登っていた。九月と言ってもまだ暑く、彼等の額には汗が光っている。

家の主人は、四十前後の短髪の男性で、高校の教師をしている。様子を窺うと、五人のうち直接この男に教えを受けた者はいないらしく、彼等のうち一人を除いては、どこかなく黙っている。

喋るのは、家の主人の方だった。汗っかきらしく、タオルで盛んに顔の汗をぬぐいながら熱弁をふるっている。

「僕も、もう四十代だ。なにかしなければならぬと思っている…」

相手をする若者の方も、

「先生、やりましょう…」と盛んに相槌を打っている。

木立に囲まれた家の窓に、黄金色の光が差し込み始めた頃、ようやく五人はこの家を辞した。

これが、我が備陽史探訪の会誕生の情景である。今思い出してもその時何を話したかは覚えていない。神谷名誉会長が、「四十代に何かしなければ…」を盛んに連発していたことだけが記憶に残っている。

会の旗揚げをする時に、一番問題となったのは、会の名称である。

「名前」は大事なもので、人でさえ名前前で人生が決まることがあるという。会の名称が具体的に何時決まったのかは覚えていないが、この問題で何度か会合を持ったことは記憶している。

議題として上ったのは、〇〇研究会とする案と、もっとくだけた名前の方が良い、という二つの案であった。このことは会の性格を決定した大事なことから、詳しく述べておくが、最初優勢だったのは「〇〇研究会」という案であった。どうも私はこちらの方に肩入れしていたように記憶するが、研究会を名乗るということは、現在のように歴史の「啓蒙」を会の使命とするのではなく、

歴史の「研究」を会の活動の中心に置くことを意味した。

この考えに真つ向から反対したのは神谷先生であつたように思う。先生の考えは、新しく出来た会に歴史の啓蒙という、市民運動の性格を持たせることであつた。そして、激論の末、現在の「備陽史探訪の会」という名称に決定された。「備陽」は備後と山陽を合わせた言葉で、この言葉からも、福山だけでなく、もっと広い範囲を、自分たちの活動範囲としようとした、当時のメンバーの心意気を感じられる。

会の名称が「備陽史探訪の会」と決定したことは、会の性格を決めた大きな出来事であつたと思う。当初から、我々は「歴史の研究」という小さな殻に閉じこもることをせず、それぞれの研究成果を、現地を探索することで一般化するという、今日の、会の活動の原則を目標としていたのである。

我々の会の特色は、何と言っても、「手作りの現地探訪(例会)」である。これは、個人の趣味としての「研究」と、会の使命としての「歴史の啓蒙」を合体させた苦心の産物であつた。

以後、会は二〇年の歩みを刻み始めることとなったが、常に水面下に

あつて頭を悩ませたのはこの問題であつた。歴史の研究はあくまで個人のものである。郷土史を研究する場合、基本的にはグループは必要ない。だが、その成果を広く一般に示すには団体は有効である。団体名で行事を行い、人を集めて「啓蒙」する。我々はこの両者を、例会を実施することで調和させたのである。

結果は、大成功であつた。はじめ十人前後の参加者で行われた「例会」は、マスコミを動員することでたちまちのうちに大型バスに入りきれない人々を集めるようになり、徒歩例会では百人を超えることもまれではなくなった。

そして、この会は二〇年を迎える今日、会員三百人を擁する、県東部はおろか、全国的にも屈指の歴史愛好者の団体となつたのである。

会の歩みを振り返りながら、今思うのは、会の活動は常に未来を見つめたものでなければならない、という平凡な事実である。現在をおろそかにする者は、未来もおろそかにする。会をこれから益々成長させようとするれば、地に足がついた活動をしなければならない。

二〇周年を迎え、会が新たな歩みをはじめににあたつて、会員の皆様により一層のご協力を願う次第である。

井原鉄道を歩く

網本善光

昨年、平成十一年のことですが、中国新聞紙上で「鴨方往来」の笠岡市分を歩き、その風景を紹介するという機会をいただきました。

漫画家の方との二人三脚の作業とはいえ、毎週の連載は取材と締切の追いかけてこでした。

笠岡市の市街地の東端に位置する絵師（えし）という地区をスタートに、富岡・笠岡・金浦・吉浜・用之江（もちのえ）など、ほぼ東西に走る旧街道の「鴨方往来」（笠岡では「浜街道」と呼んでいます）を歩きました。

その中で、地元にながらも気が付かなかった道端の風景を見つけたら、わたしたちなりのとっておきの名所や風景を紹介したりしました。また、読者の方からのお手紙に励まされたりと、連載中は楽しいこともたくさんでした。

そして今年。再び、沿道の風景を旅する機会がやってきました。

今回は、井原鉄道を使つての各駅停車の旅。神辺町をスタートして、井原市・矢掛町・真備町・清音村を経て、総社市までの旅ですが、前回

と同じく、漫画家の南一平さんと一緒にです。

ところで、八月から始まったこの連載は、井原鉄道の各駅ごとにその周辺の風景を描くものです。

先般、広島県分が無事終了しましたのですが、その取材を通じての出来事をいくつかご紹介しようと思ひます。

連載の出発は「神辺」駅。

この神辺駅で特徴的だったのは、何といつても駅を背にして立ったときに真つ正面に見える神辺城跡の姿です。険しい斜面に郭の跡がくつきりと残り、往時の迫力を想像させる遺構です。

さらにわたしたちは、旧山陽道の町並みへと向かいました。

まるで江戸時代にタイムスリップしたような気分になる、と南さんがおっしゃるのもなるほど、と思わせる風景です。

その中心的存在が「神辺本陣」です。堂々とした土塀が続き、その風格たるや、見るもののいずまいを正すような感じがありました。

南さんが切り取った風景は、本陣裏手の物見櫓。三層の木造建物というのが興味深く、さらに木々の緑を通して、白壁が鮮やかに輝いて見え

ました。

神辺までもどり、次の駅「湯野」まで行きます。

神辺町内は、井原鉄道の前身である旧国鉄井原線の工事が早くからできあがっており、それを見上げていた印象が強いものですから、今度は電車で上から景色を見ろというのは不思議な気がしました。

さて、いきなり無人駅です。

ホームから見ると神辺平野の景色は格別です。北を臨めば、迫山古墳群のある山塊が、すぐ近くは弥生時代の大集落である大宮遺跡もあることに改めて驚きました。

ちなみに、この駅の北側そばに馬が飼われていました。福山競馬の競走馬かと思つたのですが、古くは神辺宿への駅馬の供給地であつたともいう湯野の地に、今も馬が飼われているというのはおもしろい偶然だと思ひました。

続いては「御領」駅です。

たんぼの中にボツンと設けられた駅舎は車で走っていると見落としそうな感じです。

ここでは、国道三一三号の北を走る旧山陽道を歩いてみました。取材時期は夏。セミしぐれを聞きながら

の道行きます。

しばらく歩いたでしょうか、一里塚跡の碑がありました。近くには辻堂もあり、いかにも旅人の疲れをいやす場所といった風情です。

旧道ということで、今は走る車も少なく、南の国道からの喧噪がやけに無粋に聞こえていました。

さらに歩いて、県境までやってきました。

ちょうどこのあたり、集落は連続して、標識がないといつのに岡山県、ともなかなかない雰囲気です。

道端に立つ県境の石柱を興味深く見ておりましたら、向かいの食料品店のご主人が出て来られました。

聞けば、この場所を使つて、以前に岡山・広島対抗の綱引きがテレビ局の企画でおこなわれたとか。

集落としては一連のものながら、県が違えばテレビも新聞も、学校も行政サービスも異なる。でも、近所付き合いは変わりませんよ、とお話しが印象的でした。

連載はこれからも続きます。

皆さんもお気づきのことがありましたら、教えてください。お願いします。

織豊期城郭研究会

第八回研究会に参加して

城郭研究部会

九月九日と十日の二日間、岡山市において標題の織豊期城郭研究会の第八回研究会がありました。我々備陽史深訪の会よりも十一名参加を有意義な勉強をしました。

第一日目 九日十三時より十五時迄岡山城石垣を見学会

「岡山城の宇喜多・小早川・池田三時代の石垣を見る」

定刻に天守閣入口前に集まる。講師の岡山教育委員会、乗岡実氏の説明により、岡山城の本段・中の段・下の段の石垣を見て回った。全体的に現在の地表面から一米から一・五米が当時の地表面である。

中の段における西側の石垣面の勾配についても織豊期の石垣、即ち宇喜多秀家の時代の石垣は、勾配は後の小早川・池田の時代のものより急であるとの事である。そして地形にそって石垣をつくる。

それより北側の廊下門を通り、下の段の北側の石垣を見て西にまわり中の段の現在修理中の石垣を見る。

その石垣の内側に織豊期以後、その内側に織豊期時代の石垣と何回も拡張されている。

次に西側の内堀の石垣を見る。この石垣は新しい、織豊期以後だ。

次に南にまわり内下馬門へでる。ここも織豊期以後の石垣である。こ

こは後世の大手門にあたり石も面を見せて大きく見せている。

それより南の内堀石垣を見ながら東南隅より櫓・弓櫓の跡を見る。

次に本段の東南の高石垣を見る。此は宇喜多秀家の時代であろう、いわゆる織豊期の石垣である。かなり石垣も波うっており危険な状態である。

次に坂下門・六十一雁木門、このあたりの本段東側の石垣は宇喜多秀家時代のものである。

北へまわり天守閣の裏側は織豊期以後元禄の頃に補修をしている。以上で第一日目をおわる

第二日目 十日九時三十分より十七時まで

会場 岡山市立中央公民館

＊開会挨拶 岡山市教育委員会佐藤昨日に引き続き今日は織豊期の城郭研究の内石垣と礎石研究発表を岡山で行はれることは、現在岡山城の石垣を発掘修理中ですので、比地で研究発表の場をもたれた事は時宜を得たものと思います。

＊基調講演 三浦正幸（広島大学）建築学から見た礎石建物の出現家を建はじめる頃はすべて掘立柱であった。

寺社建築の進歩により掘立柱から礎石を使用するようになってきた。それが一般住宅・城郭にも使用されてくる。織豊期の発掘された遺跡を見ると、作る人にもよるものと思はれる。即番匠（建築専門職人）と素人の違いが根本だとおもう。

＊基調発表 中井 均

「考古学から見た織豊期城郭の礎石建物」

発掘された礎石建物を分類して見る

一類「居館の礎石建物」

一―a類 詰城（山城）を伴わない、平地居館における恒久的施設としての礎石建物群。

一―b類 詰城（山城）は掘立柱建物であり、その山麓に構えられた居館の礎石建物群。

二類「居住施設としての礎石建物ではなく、防御施設などの軍事的色彩の濃い建物」

二―a類 周囲から隔離された特殊な倉庫と考えられる礎石建物。

二―b類 塁線上に位置する、隅櫓・多聞櫓と考えられる礎石建物。

二―c類 主郭の中央部に位置するが、居城施設ではなく防御施設としての礎石建物。

三類「城郭内での居住機能を有する礎石建物」

三―a類 居館・詰城（山城）両方に認められる礎石建物（一部推定を含む）。

四類「城郭内に居住空間と防御空間を有する礎石建物（天主・櫓・多聞櫓・御殿）」

戦国期城郭の礎石建物から織豊期城

郭の礎石建物へ

戦国期から織豊期へ城郭の礎石建物はどのように変わってきたか、石垣・瓦は確かに、織豊期に城郭の居住空間や防御施設に現れてくる。

しかし礎石建物の方は戦国期にはすでに現れている。そして織豊期にはすべてが礎石建物になった。

石垣を作る事により礎石建物は、類線上一杯に礎石建物が作られるようになる。

高い石垣・瓦・分厚い土壁により防御施設の完全武装が出来てきた。

礎石建物も石垣の先端の塁線上に櫓・隅櫓・多聞櫓が出来るようになってくる。

このようにして、礎石建物・石垣・瓦葺といった要素が織豊期の城郭となった。

＊事例発表「甲信越地方の状況」 河西克造

甲信越地方での城郭研究からの織豊期のとらえ方として天正十年武田氏が滅んだ時以降、元和年間までとした。その上で織田方の武將が入ってきた礎石建物を継続使用もしくは再構築を行ったと考えられる。

＊事例発表「安土城本丸御殿の礎石建物」 岩橋隆造

安土城本丸の発掘調査は昭和十五・六年に行われた、その報告。

平成十一年に再び行われた。その結果分かってきた事は、従来一棟であった礎石建物が三棟である。礎石の出ない中間の部分は庭の部分であ

る。東側の葛石の外側の部分は未定。南側の張り出し部分には、櫓または多聞櫓があった。北と西の部分は未定。

*事例発表「近畿地方の状況」

多田暢久

礎石建物を考えるときに、軽量式建物を考えて見たい。とくに陣城のときは組立式の持運び可能な軽量式建物である。

*事例発表「中国地方の状況」

森 宏之

織豊期の時期を考えると、織田豊臣の勢力が中国へ影響が及び始めるとき。

その到達点が岡山城であり、広島城である。

*事例発表「南九州地方の状況」

鶴嶋俊彦

南九州に存在した城をあげている。織豊期のとらえ方は天正十五年の秀吉の九州攻めよりとする。

表の見方は一期を天正十五年以前、二期を天正十五年、三期：慶長五、四期 a：元和元年、四期 b：寛永十二年。

*討 論「織豊期城郭における礎石建物」

司会

乗岡 実

加藤理文

「以上の基調講演・基調発表・事例発表をもとに意見をのべて討論をして頂きたい。」基調講演・基調発表・事例発表より補足発表があり、互に質疑応答し、また会場よりの質問も出て、大変有意義な二日間でした。

(高橋辰巳)

ジャンヌ ダルク

岡本 貞子

成田を發ち、ドイツのフランクフルトに降り、ピスバーデン、トリアセンブルク、ナンシー、ベルダン要塞と歴訪しながらのレンタカーの旅は、四日目を迎えてジャンヌ・ダルクゆかりの地へと進んだ。

フランス救世の乙女、ジャンヌの生誕地はドイツ国境に近いドンリミイ村、この村から二〇キロ北にあるボークレールに着いた。

ここは神のお告げによつて出陣したジャンヌが、この丘にあるフランス門を潜つて出陣したと伝えられる場所である。

信仰深かった彼女は、神の声を度々聴いていたという。

そしてフランス・イギリス間の百年戦争の真只中で、神の声「この村を出て国の為に関え、勝利は神が約束する」を信じ、ボークレールの丘に建つフランス門を潜つて、神に誓つて出征したのであった。

この決意に、父母も婚約者も猛反対したが、彼女を留めることはできなかった。

私達はフランス門のある、小さな土饅頭のような丘の手前で車を止め、砂地の小道を登る。

風雪に晒された丘は、観光名所の色気を排してある。

崩れかけ、はかなく背の低い門は、大きな人間ならば身を屈めてやつと通れる高さ。ジャンヌの決意は如何ばかりであったろうか。一四二九年二月下旬、フランス門を潜りオルレアンに赴く。

それまで敗退を続けていたフランス軍は、先頭に立つジャンヌを擁して快進撃を続けた。作戦は全く神懸かりであったという。

その五カ月後には、危ぶまれていたヤルル皇太子の戴冠式を、フランスの教会で挙げ、更に先頭に立つて進撃を指揮していたところ、翌年の五月、つまりジャンヌが行動を起して一年と少々でパリ郊外コンピエーニュの封で、イギリス軍に捕らえられてしまった。彼女はルーアンの宗教法廷で「神のお告げと偽る魔女である」と烙印を押され、死刑を宣せられた。

そして衆人の見守るなか、火焔りに焼けて「イエスさま」と絶叫しながら、息絶えたという。

出陣のボークレールの丘からルーアンの火の柱に至るまで、ジャンヌは実に火の柱そのものの発光体で、十九才の短い生涯を閉じた。

もしジャンヌが、蜂起してオルレアンを奪回しなかつたら、フランス王家、否、フランスはどうなっていたらうか。

彼女は後に復権され「ルーアンの魔女裁判は無効である」と宣言された。

今、フランスのあらゆる町に、王から賜った白銀の鎧と、百合の旗を手に、ジャンヌの銅像が建っている。

ジャンヌの火刑された日をもつて、五百年後の現在も、フランス国中で彼女を偲び愛国の日としている。

フランス王家は後日、その功を称えて、王家を表す剣と王冠・百合の紋章をあてえ、ジャンヌの兄弟の一人に爵位を贈った。

その系譜は惜しいことに、五代目の聖職者の名を記したあと、絶えてしまった。

私は限らない追憶から眼覚め、丘から彼方を眺めると、戸数は約五十余り、平凡な麦畑やそのほとりを流れるミューズ川が晩春の陽に光る。

私達位の背格好の村の人が往き来していた。フランス門の建つ丘から降り、ジャンヌの生誕地ドンリミイ村にむかう。車で四〇分位か。その家は小さく慎ましい土壁の農家であった。天井に明かりとりが一つ、戸口の上部に、フランス王家から贈られた百合の紋章と、ダルク家の紋章を組合せた家紋が掲げられていた。部屋は小さく五つに区切られ、寝床は少し高く仕切られていた。当時農家は、土間に藁を敷いて寝所としていたよう、ダルク家は少し上流であったらしい。裏手に廻ると、すぐに清らかな小川と小教会があり、ジャンヌはこの教会から大きな光と共に、神の声がきこえて、恐ろしさに震えあがっていたと伝えられている。この辺りは、ドイツ国境に近く、戦乱に明け暮れていたが、その度に領主が替り、掠奪の恐怖が繰り返されたという。おそい昼食を小さなホテル兼レストラン「ジャンヌ・ダルク」でとることにした。扉を押すと客は村の仲間たちなのであろう、和気藹々とした雰囲気伝わってくる。勿論、ジャンヌの騎馬像が立ち、壁には中世の騎士像が描かれ、テーブルに小さな花・古ぼけた真鍮の蠟燭立があった。土地の料理をお願いしたところ、名物として「キッシュ」を勧められた。牛乳・メリケン粉を交ぜ、マドレーヌ皿で焼き上げる。舌ざわりはおこのみ焼をもっとしつとりさせた素朴な味わい、思い出すと今でも食して見たいそんな風味であった。地ビールはコクがあり爽やか、次は水の都ストラスブルグを走るのだ。

風の盆とは何か

門田 幸男

八月二十六日、「ふるさとの祭」と題するテレビ番組で、岐阜県八尾町の「おわら（歌の節の名前）風の盆」をやっていました。肝心の神社が画面には出てきませんでしたが、祭の行われたメインの通りが「諏訪町」というそうなので、どうやら風の神・諏訪の神の祭らしく、「二百十日」という解説の一部も聞こえたので、風に暴れられないように祈る祭のようです。

祭りの行われた「八尾」という地名は、八つの尾根に囲まれている所から名付けられたというのですが、私は自然と「八岐大蛇」のことを思い浮かべてしまいます。

以前、会報八三号にも書きましたが、実は、諏訪の神は蛇神なのです。ですから、八岐大蛇を連想させる八尾で諏訪の神が祀られているのはある意味当然なのかも知れません。

今回は、風神・蛇神の祭の隠された意味を陰陽五行思想に照らして読み解いてみたいと思います。

南のことで「巽」とも表します。言い換えれば、東南は蛇神を象徴する方位ということになります。

ところで、陰陽五行には、「金剋木（金気は木気に剋つ）」という原理があります。わかりやすくいえば、金属（刃物）は木（植物）を斬ることでできるので、金気は木気より強いということなのです。

一方、巽（辰巳（東南））は五気（金）と木気にあたります。そこで、木気の蛇神・風の神・諏訪の神の威力を押さえるには、金気の事象をそろえればよいことになります。

たとえば、祭の行われる八月は金気（の月）です（七月・九月も）。風神の力を押さえるのはまさに最適で、台風（襲来）する二百十日うんぬんは後からの付け足しです。

次に、木気を金気で押さえる象徴的な呪術を行う別の祭があるので紹介しましょう（会報八三号参照）。

それは石川県鹿西町にある鎌の宮諏訪神社です。この神社では、御神木のタブの木に鉄の鎌を毎年毎年打ち込む呪術を行います。いうまでもなく、風の神の宿る御神木は木気の象徴であり、鉄の鎌は金気の象徴です。蛇の鎌首というように、風神の蛇を象った金属製品を風神を表す御神木に打ち込んで殺し、刃先で吹いてく

る風を切り裂く巧妙な作戦で、さすがの風神・台風もこの呪術で押さえ込まれてしまうというわけです。

さて、八尾の場合はどうでしょう。か。実は踊りの伴奏が胡弓なのです。弓は蛇の造形の象徴と考えられますから、一晚中酷使し、体力を消耗させるという意味があるのではないのでしょうか。その音色はあたかも哭くがごとき印象です。

この「哭く」という行為は陰陽五行では、金気に配当されています。つまり、胡弓を弾くことは風神をいじめことを意味すると思います。昔の人の思考原則を陰陽思想の物差しで測れば、私如き非才でもこの程度は見えてきます。ただし、一〇〇%当たっているとは保証できませんが、ここからは、「哭く」ことの意味を別の角度から考えてみましょう。「古事記」を勉強された方は次のような話を記憶したいと思います。

三貴子（アマテラス・ツクヨミ・スサノオ）が、父神イザナギにそれぞれ高天原・夜の食国・海原を支配せよと命じられたにもかかわらず、スサノオは「八拳須心（やくしん）の前に至るまで啼きいささき。その泣く状は、青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき」という有様でした。この話の意味を民俗学者の吉野裕

子先生は次のように説明されています。私もスサノオの涕泣は別の考えでは解けないと思っています。

すなわち、易の理論で中男（成年男子・坎）のスサノオは、先天易では、金気の西（方位）に配置され、中女（成年女子・離）のアマテラスは木気の東に配置されているので、先の「金剋木」の原理から、アマテラスはスサノオに勝てず、それを表現したのが青山（木気）を泣き枯らす（金気）ということなのです。

また、「木生火（木は火を生む）」という陰陽五行の原理によって、中女のアマテラスは離（火気、方位は南）の位置へ移ります。それに対して中男（坎）のスサノオは、「金生水（金は水を生む）」の原理によって水気の坤（家族では母・方位では北）の位置へ行きたがって哭くというわけなのです。

ここから導かれることは、先天易の父イザナギ（乾）の位置であった南へ入ることから、中女のアマテラスが高天原を委譲される必然性です。他方、スサノオが葦原中国ではなく、「海原を知らせ（支配せよ）」と命じられるのも、古事記学者の中村啓信先生は、唐突だ、と書かれています。が、いっこうに不思議ではないという事です。

出雲路の史跡探訪

坂井 邦典

平成十二年八月二七日 快晴。

五時十分 福山出発。同行四人。

六時十四分 東城道の駅。

六時五十四分 奥出雲おろちループ道の駅。

七時七分 出雲坂根駅。

駅前の延命水をしつかり飲んだ。

八時六分 三刀屋(尾崎城)城跡。

承久三年(一二二二)以来、三六〇

年余にわたり、この地を支配した三

刀屋氏(初めは諏訪部氏)の居城で

あった。説明板には平山城と書いて

あるが、城のある山は比高が一〇〇

mくらいで、自然の地形を利用して

いるから山城であると思う。急な斜

面で、所々に石垣の一部が残っている。

現在には公園になって桜が三千本

植えてある本丸の片隅に稲荷神社が

祀ってあった。

突然、自動車が登場してきて四十歳

くらいの男の人が降りた。我々に福

山ナンバーの人かと尋ねた。そうだと

と答えたら、「よかった」と心の底

から言った。我々には何のことかわ

からない。その人曰く、この場所は

自殺の名所になっているから、自殺

に来たと思った由。先日も広大生が

この桜の木で首をくくったと言われ、ゾッとして思わず頭上の桜を見上げた。

八時三六分 松本古墳群(三刀屋町)

城山の麓から五〇〇mくらい離れた幼稚園の駐車場に説明板があり、そこから五〇mくらい歩いた丘陵上に築かれている。

松本古墳群は第一号古墳から第六号古墳までである。

第一号古墳：昭和三十六年(一九六

一)桃畑開墾の際に出た土器片よりわかった。全長五〇mの前方後方墳。

前方部に長さ五mの箱形木棺、長さ四・七mの割竹形木棺が各一基あった。

四世紀の築造と考えられている。

第二号古墳：直径一五mの円墳。

第三号古墳：全長五二mの前方後方墳で、奈良の箸墓古墳に類似した前方部がバチ形を呈している。一号古墳と同時期のものである。

第四号古墳：一辺七mの方墳。

第五号古墳：径一〇mの円墳。

第六号古墳：径一〇mの円墳。

第四・第五・第六号古墳はそれぞれ終末期の七世紀後半のものである。

九時二五分 神原神社古墳(加茂町)

加茂町を流れる赤川の河川工事で、神原神社を移転する際に本殿の下の方墳を発掘調査した。現在は新しく移転した神社の境内に竪穴式石室が

復元してある。

南北三四m、東西三〇m、高さ三mの方墳である。竪穴式石室は長さ五・八m、幅は北端で一・四m、南端で

〇・九m、床面から蓋までの高さは一・四mである。石室の四壁は近傍で

産出する扁平な板状石を持ち送り式に積んである。床面に長さ五mの割竹形木棺が置かれた跡が残っている。

この古墳は四世紀中頃のもので考えられている。

珍しいのは日本全国唯一の景初三年(二三九)銘の三角縁神獣鏡が出土したことである。

九時五十分 加茂岩倉遺跡(加茂町)

「進入禁止」と書いてある道に自動車を持ち入れた。道の終わったところが遺跡であった。プレハブ小屋があり、日曜日なのに監視人がいたのは驚いた。だが、我々を見ていただけで何も言われなかったのでホッとした。

平成八年(一九九六)十月十四日、農道工事の際に三九個の銅鐸が発見された。銅鐸は形などから何れも弥生時代中期、すなわち紀元前二世紀から一世紀までの間に製作されたといわれる。そして一世紀頃にまとめて埋納されたと推定されている。

近畿地方で製作されたとの説があるが、三九個のうち絵面を描いたものや、六区装束模文の銅鐸の中には近畿にみられない特徴があり、出雲ないしはその周辺で造られた可能性が高い。

丘の上にある道は横木が敷かれて整備してあったが、銅鐸の埋まっていた場所は埋め戻してあるので、出土状況は見る事ができなかった。ただ、そばに発掘時の出土状況を撮った写真パネルが展示してあった。

十時十分 菟古館(宍道町)

ちようど骨董市が開かれていて人が多数出入りしていた。いろいろな品が渡された。本日の入館は無料のことと。館内には古墳よりの出土品、邪視文銅鐸、書画、陶磁器、文房具、産業民具などが展示してあった。骨董はロクなものかなかった。

八雲本陣記念財団理事長、木幡修介氏が昭和六年(一九三一)に開館したものである。木幡氏の先祖は山城国出身で、石山本願寺に随身していた。織田信長の本願寺攻めの後、宍道の地に定住した。松江藩主に苗字帯刀を許されて、居宅は本陣宿をつとめ、八雲本陣といわれた。

十時三十分 出発。

十時四五分 女夫岩遺跡(宍道町)

道路から山の斜面にかけてよく整備された階段を、息を切らしながら

登った。巨石があり、注連縄が張ってあった。二つの巨石の真ん中に大きな木が生えている。巨石は北側のものが $9\text{m} \times 2.5\text{m} \times 4\text{m}$ 、南側のものが $6\text{m} \times 3\text{m} \times 1.5\text{m}$ ある。古墳時代中期から後期（五世紀～七世紀）の祭祀に使われたと思われる土器が出土した。そして古代から現代まで祭祀が続いている。

この巨石は「出雲風土記」の地名伝承に書かれた「猪の像（猪石）」にあたるという考えがあり、石宮神社の巨石とともに風土記伝承と現存する遺跡との関わりを考える上でも貴重な遺跡である。

現在、中国横断道路尾道松江線の予定地に当たるので遺跡保存について揺れていたが、県史跡に指定されて保存が確定した。

十一時五分 石宮神社（宍道町）

道路に面した鳥居をはさんで左右に猪石があり、階段を上ったところに大石がある小さな神社である。この大石が当社の御神体である。天平五年（七三五）の「出雲国風土記」に地名の由来を伝えている。出雲国を治めておられた大穴持命（大國主命）が犬を使って猪狩をされた。この時に追われていた二匹の猪と追いかけていた犬は石となって今でも残っていて、これらの石であるという。



石宮神社 右の大岩が猪石

で表現してあった。また、化石展が開かれていた。

一二時七分 出発。

鏡北遺古墳（宍道町）

古墳の場所を探し回ったが、ついにわからなかった。探すのを諦めたのであった。

一辺一〇m、高さ二mの小さな方墳、来待石の切石で造られた横穴式石室である。玄室は一・八m、一・二m。各壁とも一枚石で、天井石の内と外とも家形に加工され、家形石棺を思わせる。玄門を閉ざす閉塞石は表面に門状の浮き彫りが施されているのが特徴で、七世紀中頃、最終末の築造と推定されている。

一三時十五分

出雲大社近くの荒木屋にて昼食。

「わりごそば」

一三時十五分 出雲大社（大社町）

出雲大社の起源について「古事記」「日本書紀」は大國主命の国譲りの事績に対して天照大神の命により大國主命の神殿を高天原の神の宮殿と同じように太い柱、厚い板をもって千木を高く掲げて建造されたといっている。

出雲大社は神殿の高さが、上古には三二丈（九六m）、中古には一六丈（四八m）と書いてある。神殿の高さを表したと思われるものに天祿元

年（九八〇）に編集された「口遊」がある。これに日本国中の建物の大きさのベストスリーの記事があり、「雲太・和二・京三」として一番を出雲大社の神殿、二番を大和の東大寺大仏殿、三番を平安京大極殿としている。

さらに出雲国千家家に伝わる「金輪御造管差図」という図面に、神殿は一辺が四丈（一二m）の平面正方形とし、各柱は三本の柱を鉄の輪で束ねて一本の柱とし、正面の階段の長さは一町（一〇九m）と記されている。

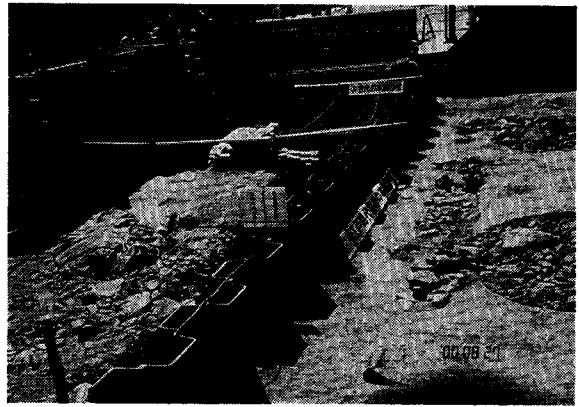
中世以降は規模を縮小し、江戸前期には高さ二四mの神殿となり、現在に至っている。

平成十一年（一九九九）九月一日から、出雲大社神殿への地下通路建設計画により発掘調査を実施したことから次のものが発見された。

最大径一三五cmの柱材三本と一つに束ねて一本の柱（径三m）としてある。この構造は金輪御造管差図の柱と同じである。出土したのは平安時代後半の宇豆柱と考えられる。

また、隣に江戸時代初めごろと思われる礎石建物跡が見つかった。

先日発見されたこの柱材がテレビで映し出された。それを自分目で確かめようと思い、今日の出雲行きと



出雲大社巨大木柱跡

なったわけである。

だが、柱は埋めてあり見ることはかなわなかった。発掘時の写真が数枚パネルにして展示してあったのみ。

平田さんより大社造りの建築の説明を聞きながら社殿を一周した。

一四時三十分 出雲大社発。

一五時十分 大念寺古墳(出雲市)

大念寺の墓地の間を通り、裏山にあった東西に主軸をもった全長一〇〇mの前方後円墳である。全長二・八mの横穴式石室で、両袖式である。前室には組み合わせ式石棺の基底部のみがあり、奥室には全国でも最大

級の家形石棺が置かれてあった。長さ三・三m、幅一・七m、高さ一・九mの大きさである。石室の周囲は版築状瓦層とよばれる工法で崩れないように築かれている。古墳時代後期(六世紀中頃)の築造と考えられている。

一五時四十分 上塩冶築山古墳(出雲市)

どこにあるか右往左往、行きつ戻りつ探した。地元の人にもわからなかったのに平田さんの犬にも勝る五感により発見した。自動車学校がヒントになったのだ。

出雲市上塩冶町二二八番地、森山家の庭の築山である。築山といっても広さ一〇〇mくらい、大木は茂り無、竹藪で蚊がいっぱいいた。

直径四二m、高さ六mの円墳と推定されている。南西方向に開口している横穴式石室で、全長一四・六m、両袖式。玄室内には大小二個の削り抜き式家形石棺があった。二つとも側壁に大きな穴がくり抜かれている。六世紀後半の造りと考えられている。

一五時五十分 西谷墳墓群(出雲市)

今までと違って時代は古く、弥生時代の終わりから古墳時代にかけての大墳墓群である。墳丘墓の数は二七基もある。しかも、多くは「四隅突出型墳丘墓」である。

西谷三号墓：突出部を入れると東

西五〇m、南北四〇m、高さ四・五mという巨大なもの。墳丘の斜面と突出部に箱石が貼り着けてある。墳丘には十個の墓穴があつて、木棺が入れてあった跡が残っていた。出土した中に吉備で作られた特殊器台や、北陸で作られた土器があったので、埋葬された「王」が他地域と広い交流をもっていたものと考えられる。また、このころ三号墓の主は卑弥呼が活躍する時期を生きた出雲の「王」ということである。

一六時三十分 神庭荒神谷遺跡・史跡公園(斐川町)

昭和五九年(一九八四)七月、農道予定地の調査中、標高二・二mの丘陵の斜面に四列に整然と並べられた銅剣が発見された。その総数三五八本で、今までの国内総出土数が約三〇〇本であったから考古学会が一驚した。

さらに昭和六〇年(一九八五)七月、すぐ近くの地点で銅鐸六個・銅矛一六本が出土した。弥生時代にこの地方が政治・文化の中心地であったと思われる。

出土した場所は模造品が置いて復元してあった。駐車場は広く、子供の遊園地や池があつて公園施設が整備してあった。

一七時九分 神庭岩船山古墳(斐川町)

莊原小学校の校庭にある全長五八mの前方後円墳。後円部の上に長さ二・七m、幅一mで、円柱状の縄掛突起をもつ舟形石棺の蓋石が残っているが、数個に割れていた。墳丘や石棺の形などから築造は五世紀代と考えられている。

今回、出雲地方の各古墳を廻って感心したことがある。島根県の各地の教育委員会は、古墳や墳丘墓の説明板のところに箱を作り、その中に紙質の良い色刷りの資料をたくさん入れていた。見学者にとつてたいへん有り難いことである。

一七時一九分出発。帰路につく。

車の中で道の傍らに素敵な温泉があるから、どうしても浸かって帰りたいとの希望があり、湯村温泉(木次町)に寄った。斐伊川の支流、漆仁川にかかる漆仁橋を渡ったところにある鄙びた宿である。温乃上館で入浴料二〇〇円を払って漆仁湯に入った。温度は適温、湯の量もたえず出ている。少し塩味がしたが、自分の汗が口に入ったものとわかった。アルカリ性単純泉で、飲んでみると無味無臭の湯であつた。手拭い石鹸は自分持ちであつた。汗を流し、さっぱりとして一同大満足した。

一八時四三分、発。

二二時〇〇分、福山着。

二十周年記念一泊旅行

—わが手に国のまほろばを—

赤松 雅子

探訪先が多いので、特に私の記憶に残ったところを中心に書かせていただきます。

高速道路を降りてすぐ筒井順慶の墓に詣でた後、慈光院を訪れました。

慈光院——片桐且元の甥、石州(貞俊・貞昌)が父の貞隆の菩提寺として寛文元年(一六六一)に臨済宗の寺院として建立したものです。

斑鳩の里にほど近い小丘へ木々の間をあられこぼしの道に沿って歩くと、片桐且元の故城、茨木城より移築された楼門があります。一歩足を踏み入れると、大きな茅葺きの一見田舎の豪農の家と庭を思わす豊かな眺めがありました。茶席風の書院で一服のお茶をいただき、禅味のあふれた大刈り込みの庭園を眺め、大和に來たなと実感しました。

それから豊臣秀長の大納言塚を見学し、栄枯盛衰、次々と城主を替えた大和郡山城に登りました。

秀長時代に大規模で性急な構築方法が行われたようで、奈良中の家並に五郎太石を出させるだけでなく、大寺院まで手を伸ばして礎石、庭石



慈光院 寺院とは思えない

はじめ多くの石造物を収奪して天守台や各郭の石垣に使用したようです。平城京羅城門の礎石、石地藏、五輪塔、庭石、供養塔さらには横穴式石室の石材をなどがはめ込まれているのを見て歩きました。橿原考古学研究所の河上先生も多くの古墳が壊されたと話されていたが、実際に見て驚きました。

昼食の後「古事記」の語部、稗田阿礼を祀った、賣太神社へ行きました。天武天皇十三年(六八四)、「帝皇日繼」や「先代旧辞」を暗誦させられ、元明天皇の和銅四年(七一

一)、記憶していることを太安万侶に記述させ、「古事記」三巻ができたのだそうです。神社は新しすぎて「古事記」との距離がありすぎました。が、大和郡山市指定史跡の稗田の集落、それを取り巻く環濠は水も澄んで五月の青空を映し、きれいな環境が維持されていて感激しました。

七堂伽藍を備えた立派な寺院でしたが、時とともに衰頹し、兵火などにも遭い、今は修復中の本堂一字を残すのみとなっています。しかし、宝物庫で拝観した本尊虚空蔵菩薩像は日本最古の虚空蔵菩薩像とされ、国重文に指定されています。

次に行った額安寺、このあたりは水運の要所で、外国使節や文物の上陸場所、聖徳太子がここに学問修業の道場「熊凝精舎」を建てられたといいます。「額安寺」の寺号は推古天皇に賜ったと伝えられています。

それから少し歩いて、かつて境内だったところに点在する額安寺宝篋印塔(県重文)、額安寺五輪塔群(鎌倉墓、国重文)を見学しました。

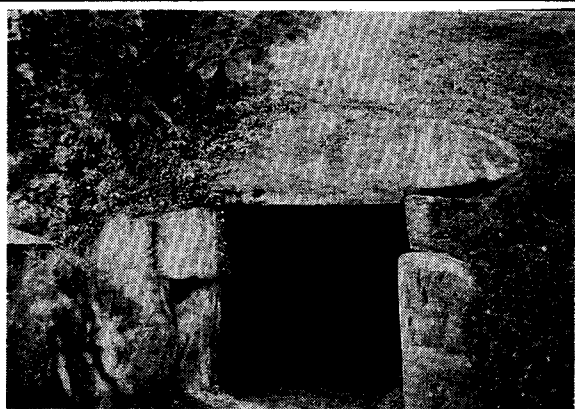
この後、島の山古墳、橿原考古学研究所附属博物館を見学して宿舎に入りました。



額安寺五輪塔群 (鎌倉墓)

二日目は、早朝宿舎近くの約六百基あるといわれる、スキートのモータールコースのような新沢千塚古墳群を見学して、近鉄飛鳥駅近くの岩屋山古墳に行きました。石室は黒斑入り花崗岩で、玄室は二段積み、羨道は一段積みで、入口に近い部分だけ二段積みです。天井は一枚の巨岩です。巨石を積んだ横穴式石室の中で最もシンプルで美しいといわれ、石室編年の基準(岩屋山式石室)となっている古墳です。

次は内部保護のため永久非公開となった高松塚古墳の壁画館です。発見された壁画はすべてを原寸大で、精巧に模写するのに画家二十人が約二年を費やしたといわれています。



切石で築かれた岩屋山古墳石室

見は余り大きくなく、こんもりとした円墳で、竹藪に覆われていました。被葬者は天武天皇の皇子高市か忍壁ではないかといわれています。

その後、北に十分くらい歩いて中尾山古墳に行きました。終末期古墳として内部構造、墳丘の大きさ等、好例だといわれています。

発掘調査では、墳丘は三段築成八角形墳で、内部の横口式石槨は幅九〇cm、長さ九三cm、高さ八七cmです。大ききから火葬され、骨蔵基に納められて安置されたのだらうということです。

とです。被葬者は文武天皇では決まりのようです。その代わりか、説明はなかったのですが、束明神古墳の復元石槨が近くに置いてありました。束明神古墳の被葬者は文武天皇の父、草壁皇子とされています。

飛鳥国立公園館で休憩した後、吉備姫王墓内にある有名な猿石三体、鬼の祖・雪隠といわれている横口式石槨の床石と天井・壁を構成する蓋石、ユーモラスな亀石等を見て橋寺に行きました。

敏達天皇三年(五七四)、聖徳太子は別宮橘宮のこの地で誕生したといえます。善面・惡面の二面石、五重塔の塔跡、太子勝蔓經ご講讀の時、冠から日・月・星の光が輝いたという三光石、その折降った蓮の華を埋

めた蓮華塚、その面積を後に大化の改新の時、一畝の基準にしたので畝割塚とも呼ばれています。観音堂にある六臂如意輪觀世音菩薩は藤原時代独特の端麗と慈容をそなえた木造座像でした。

昼食の後、蘇我馬子の墓といわれている石舞台古墳です。肝をつぶすほどの巨岩で墓を築き、今ははだか石をさらしているのが痛々しく盛者必衰の歴史をまざまざと見る思いでした。川原寺跡から南方向の山の中腹に見える三重塔を眺め、あこがれていた岡寺へ行きました。本堂は古色蒼然、三重塔の下で写真を撮りました。

ここからは歩いて酒船石、謎の石造物として長く語り伝えられてきたこの石もやっと平成十二年、亀形石水槽遺跡の発掘により、その用途の想像がつかまりました。

それから酒船石遺跡の坂を下って伝飛鳥板蓋宮跡を見て飛鳥寺へ行きました。蘇我馬子創建の日本最古の寺院です。用明天皇二年(五八七年)、百濟より寺工・露盤博士・瓦博士が渡来して約十年の歳月を要して建立されたといわれていますが、現在安居院のみが残っています。本尊釈迦如来像は止利仏師作、日本最古の仏像です。

右から左から眺めて案内書を読むと、目と額の部分、右手指三本のみが当初のものとあるのでちよつとがっかりしましたが、ありがたいお姿の仏様でした。横の展示場には最古の瓦もありました。以前、奈良市の元興寺に行った折、一部、飛鳥寺の古瓦が移築使われていると説明があり、よく見ると、色・形ではっきり分かります、千四百余年の雨露をしいでいるのかと感心した覚えがありました。

飛鳥座神社は五穀豊穡、特に子孫繁栄を祈る神社のようです。神職は飛鳥家が世襲とありますから、最も古い祭祀形態が今に残った由緒ある神社なのだと思います。以前行ったときはポロポロの小さなお堂でしたが、新しい立派な神殿になっていましたので地域で大事にされていることも分かりました。

今回の旅行は二十周年記念ということで、旅行委員の三好さん、坂本さん、平田さんが行き先を決めるときからアンケートを採り、入念な下見・資料作り、現地説明ととても充実した楽しい旅行でした。古代から中世の歴史を幅広くしっかり胸に刻んで感激しました。参加者全員、わが手に大和の国のまほろばをつかめたいと思います。お世話になりました。

ひらかた 枚方案内

足立 捷一郎

福山から大阪枚方の我が家へ引越してから早や八ヶ月経ちました。

備陽史探訪の会でいろいろ歴史の講義や探訪に参加させていただきましたが、今では京都をはじめ近辺の探訪をしているところです。

私の住んでいる枚方市は、人口は福山とほぼ同じ四〇万を擁し、六つの大学があり、大阪と京都の中間に位置する街で、関西では昔から「枚方の大菊人形展」として親しまれ、最近では「ひらパー」(枚方パーク)として若者に脚光をあびているところです。又枚方には、かつて川砂が白く光って見え、宇宙の銀河を思わせることからその名が付いた「天野川」と天野川に架かる「逢合橋」(織姫と彦星の待ち合わせ場所)「かささぎ橋」(雨の七夕に鶴が翼を広げて橋渡しをしたこと)「天津橋」(天の川にかかる橋)など、七夕にまつわるものが数多く見られるため、「七夕伝説」発祥の地として毎年夏に「天の川七夕星まつり」が開催されています。

枚方市にはいろいろな名所旧跡があります。例えば日本古代史に登場

する学者で、応神天皇のころ、「論語」十卷、「千字文」一巻を携えて百濟から渡来したといわれ、漢字を日本に伝えた王仁博士の墓、奈良時代に活躍した百済王一族の百済寺跡、筒井順慶で有名な洞ヶ峠、秀頼が再建した大阪城鬼門除鎮護の式内社片埴神社等々です。

会報九二号に、熊谷操子さんが「蹉陀」を書かれています、これも枚方です。

紙面の都合上、歴史的な三つの項目にしほり紹介させていただきます。

一、古代史の謎「継体大王」

第二十五代武烈天皇が亡くなった後、跡継がいなくなり、急遽大伴金村等が応神天皇の五世孫の「オオ(ホ)ト王」(当時五十九才)を、越前三国(古事記には近江)より連れてきた。「オオト王」は「樟葉宮」で第二十六代継体天皇として即位した。その後、山城(背)国「筒城宮」(現一休寺酬恩庵)近くの同志社大学構内、「弟国宮」(現長岡京市・向日市)を経て即位二十年後大和国の磐余玉穗宮(現桜井市)に移った。

天皇家は万世一系であるといわれていたが、戦後「王朝交替論」が出て、継体天皇以降を新王朝としている研究報告がある。

伝承地」が枚方にあります。北側に石清水八幡宮、東側に洞ヶ峠、西側に淀川を挟んで山崎天王山があり、南側は生駒連山麓河内平野が広がっている。

現在、木立につつまれ森閑とした交野神社の奥に「此附近継体天皇樟葉宮址」の顕彰碑が立っている。

二、古人の夢のあと

文徳天皇の第一皇子惟喬親王(母は紀氏の出身)は、第四皇子惟仁親王(後の清和天皇、母は藤原氏の出身)が生まれたため皇太子になれなかった。天皇は惟喬親王を寵愛し皇太子にするつもりであったが、藤原良房の威をばかって惟喬をあきらめ惟仁を皇太子にすえざるを得なかった。

皇位継承の望みを絶たれた惟喬親王は、姻戚の紀有常、在原業平等とともに、狩猟や花見に交野ヶ原(現枚方市)の別荘渚院にしばしば訪れた。

伊勢物語や古今和歌集にある

「世の中にたえて桜の無かりせば 春の心はのどけからまし」

の有名な歌は、在原業平が渚院の桜を詠んだものである。又、この唄は桜になぞらえて、皇位継承についての感慨が詠み込まれているといわれている。

後年、紀貫之が淀川の船上から渚院の跡を見て、『土佐日記』で親王や業平を偲んでいる。

渚院跡に観音寺が建てられたが明治三年廃寺となり、現在鐘楼と梵鐘そして渚院跡の石碑がある。

三、今も残る宿場町の面影

豊臣秀吉が大阪城・伏見城に築城を終えると、この二拠点を最短距離で結ぶため、一五九六年淀川左岸に文祿堤を構築し、堤の上を道路として利用した。後の京街道である。それまでは山城と河内を結ぶ街道としては、洞ヶ峠から生駒山地西麓を下する東高野街道がよく利用されていた。一六一六年頃、京街道には東海道五十七次の宿場として伏見・淀・枚方・守口の四宿が設けられた。東海道五十三次が一般的だが、江戸幕府の公文書には東海道は品川宿より守口宿までという記述もある。

枚方は東海道五十七次の五十六番目の宿場街である。

京街道は淀川沿いに通っているの、下りの荷物は伏見から船で運搬され、枚方では上りの荷物の引継が多かった。淀川を利用する人はおなじみの三十石船(定員二十八人・船頭四人)に乗り、上りは一日又は一晩、下りは半日で往来した。上りは川の流れに逆らうため、人夫が船に

綱をつけ、淀川の岸を歩いて船を引つ張つたといわれている。

朝鮮・琉球使節が江戸に向かう時には多数の船を仕立てて伏見まで淀川を上つていったそうである。

三十石船は伏見と大阪天満の中間の枚方に碇泊するので、この船に、あん餅、ごぼう汁、巻きずし、酒などを売る茶舟（煮売舟）を漕ぎ寄せ、「くらわんか、餅くらわんか、酒くらわんか、：銭がないのでようくらわんか：」と大声で売りつけ、「くらわんか舟」という俗称が生まれ、枚方名物になった。口ぎたなくのしることも天下御免の特権として許されていた。弥次さん喜多さんで有名な「東海道中膝栗毛」にも描かれている。

くらわんか舟が使った器は伊万里焼の日常磁器が多く、「くらわんか茶碗」と呼ばれ、今日でも川底から見つかることがある。

一六三五年参勤交代の制度が確立されると、京街道は紀州・泉州の大名の参勤路とされ、長崎奉行の往来もあった。

一七四四年以降御三家の紀州藩主は、それまでの伊勢街道を止めて、京街道を通るようになった。

一七八〇年頃京街道枚方宿は東西一四四七m、道幅四・五m、四つの村

から構成され、人足百名、伝馬百頭を備え、東海道でも屈指の大きな宿場町で、三十四軒が京街道の両側に軒を並べ、本陣のほか、一般の旅籠は三三軒、休息の茶屋は七軒、商人・職人の店は四七軒あり、交通の要衝としてにぎわいをみせた。「ここはどこじゃと船頭衆に問えば、ここは枚方鍵屋浦、鍵屋浦には碇はいらぬ、三味や太鼓で船止める」と「淀川三十石舟唄」に唄われている。枚方宿の繁栄は、沢山の遊女に依存した遊好に支えられていた。

枚方を多くの旅人が通ったが、貝原益軒、滝沢馬琴、司馬江漢などは紀行文の中に枚方の風物を記している。特にドイツ人医師シーボルトは「：大阪郊外の遊樂地のようにだった。：枚方の美しい風景は遠く故郷のメイン渓谷を思い出させた。：」と書き記している。

現在は、京街道を整備していて、市外よりこの街道を歩きに来る人が増えてきている。この京街道近くの小さな山に、淀川を上下する舟人らが、通行の安全を祈願して創建されたと伝えられる式内社意賀美神社があり、豊かな木々に囲まれた境内は、枚方八景の一つになっている。神社の東側の住宅の一角に森繁久弥の元生家もある。

徒歩例会によせて

備後の古代山城

七森 義人

山口氏から原稿の依頼があった。

そこで、十二月に例会行事で常城の推定地に向かう予定なので、古代山城について、考えてみよう。

備後国には常城・茨城の二城があると紀紀（日本書紀・続日本紀）に記されている。備後国以外に紀紀に記されている城が、一国に二城あるところがあるであろうか。一国に二城記されているものは紀紀にはない。

文献に記されていない神籠石と呼ばれているものを含めると一国に二城あるものはある。何故、備後国だけ二城あるのだろうか。

それは、備後国の国府の所在地と海陸交通に関係があると考えられる。備後国の国府は府中市にあるという説が有力であるが、深安郡神辺町に

国分寺がある事からこの地に国府があったという説、国府がこの地から府中市に移動したという説があるので、府中市と神辺町に城が二つあったという考えがある。また、山陽道が内陸を通っていて、航路から離れているので、内陸の城と沿岸の城の二城という考えがある。

先に神籠石と呼ばれるものを含め

ると二城あると書きましたが、神籠石と、紀紀に記されている朝鮮式山城という城の違いは何でしょうか。

結論を言えば久留米市の高良山に山を取り囲むように石が巡っていて、文献に記されていないものを土地の人がそのうちの一個の巨石を神籠石と呼んでいたものを歴史雑誌に記した人が山の列石そのものを神籠石と呼ぶと勘違いして後、山の列石を神籠石ようになりましたが、最近では他の地方で、いろいろな種類が見つかるようになりました。そして、朝鮮式山城と構造がほとんど変わらないものもあります。

紀紀に記されているものと記されていないものの違いはよくわかっていませんが、紀紀に記されているものは当時の政権が築造を指揮したものであることは間違いありません。しかし、神籠石と呼ばれるものはどのようなものでしょうか。地方政権が築いたという説、朝鮮からの帰化人が築いたという説、ただたんに紀紀に記されていないだけという説があります。神籠石もいろいろな種類があると書きましたが、元々の種類は土塁の根止め石と考えられている石の部分だけが見えたものをいっています。

備後国の二城はともに紀紀に記

されているので、朝鮮式山城と考えられます。この朝鮮式山城は、石垣・土塁・門跡・水門跡という構造があります。

備後国の古代山城は神辺町に茨城があると考えた高垣不敏氏の説と府中市に常城・福山市蔵王町に茨城があると考えた豊元国氏の説が最初です。

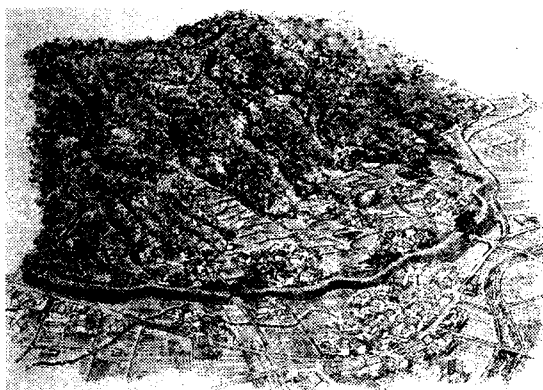
神辺町の要害山・山王山一帯を茨城を考えたのは土塁が残っている・瓦が出土する・茨城に関連すると思われる馬崎という小字が残っている・山陽道が麓を通る等という考えからこの地を茨城と考えました。

福山市蔵王町の蔵王山を茨城と豊元国氏が考えたのは瓦が出土する・綱木という地名が残る・深津市という古代の港湾が麓にあったと考えて、常城を山陽道に対して、茨城を瀬戸内航路の港湾に対した。府中市の火呑山から新市町の常一帯を豊元国氏が常城と考えたのは新市町常の麓の石垣と水門跡を当時のものと考えて、青目寺の寺域の境界を土塁と考えたこと等です。これは、豊元国氏は常城・茨城をこの城よりも少し新しい福岡県に築造された怡土城と同じような構造（山の山頂から麓まで尾根線を土塁と望楼で結び、麓の平地に土塁を築いている）ように常城も茨

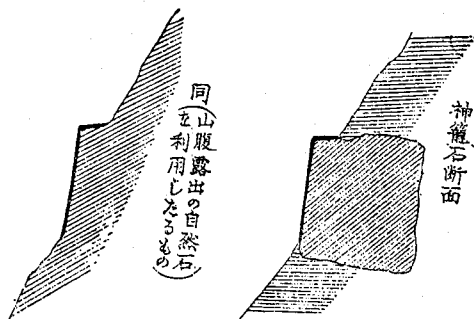
城も山頂から麓まで土塁で結び麓にも土塁を築くと考えていたことからこのような山頂から麓を含めた広大な城域と考えたとおもわれます。

この後、脇坂光彦氏が府中市の常城を豊元国氏の案の西方の青目寺一帯を考える説を出し、この説が一番有力視されています。他にも、古代山城と考える地がいろいろと出されていますが、一般に確実視されていません。

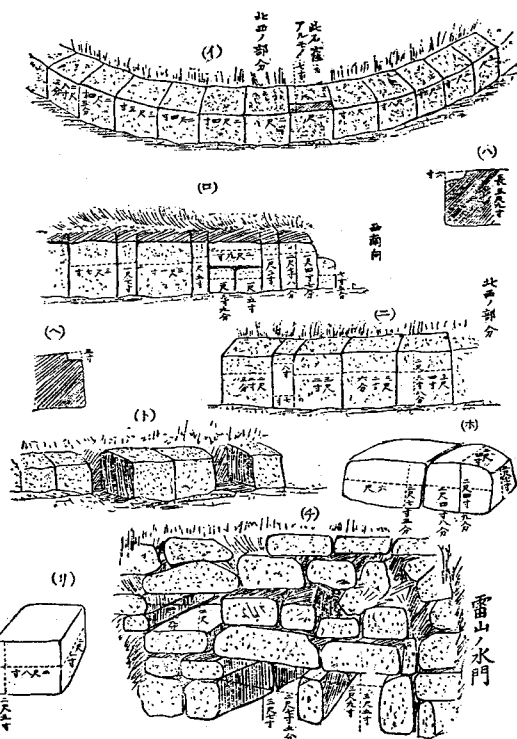
他の所在地は岡山県井原市も含む説があります。現在、文献などを示めせと言われれば困りますが、私が聞いていた所在地だけでもかなりあります。府中市土生町・目崎町・七ツ池の北方一帯・芦品郡新市町の宮内・相方城一帯・新市町と福山市の境の蛇円山一帯・加茂町芦原・北山の芋原一帯・神辺町の中条の木之上城・中条の西方の山塊・御領の北方の山塊・神辺町と福山市千田町境の天神山一帯・郷分町の山塊と岡山県井原市の経ヶ丸一帯等が私が聞いていたものだけでもありますが根拠の乏しいものばかりです。さすがに常城の常という地名が現在新市町に残っているもので、そのあたり一帯を説にするものが多いようです。



怡土城想定図



神籠石断面



20周年特別企画徒歩例会 徒歩例会

「笠岡の古代と近代」

ゆつたりと歩く笠岡・木漏れ
陽に昔日を思う

十二月三日の徒歩例会は笠岡を訪ねます。笠岡駅前から井原鉄道小田駅まで旧井笠鉄道の路線に沿ってゆつくりと歩きます。

《見学場所》

関戸庵寺…白鳳から天平時代に創建されたといわれる

長福寺裏山古墳群

・東塚…全長五十mの前方後円墳

・仙人塚…全長四十三mの帆立貝式古墳

・双つ塚…全長六十三mの前方後円墳

・一つ塚

・七つ塚など

井笠鉄道資料館他

木漏れ陽から垣間見える物言わぬ史跡、歴史の証人たち。私達と一緒に会いに行きませんか。そして、時を越えて話してみませんか。

《集合日時》

十二月三日（日）午前八時三十分

《集合場所》 JR笠岡駅前

《参加費》 実費程度

《講師》

網本善光（古墳研究部会副部会長）

安原誉佳（古墳研究部会評議委員）

第11回郷土史講座

「福山―歴史の謎」

十一月二五日（土）の郷土史講座は田口会長が福山―歴史の謎と題して、古代から近世までの福山の歴史の謎や問題点を

① 邪馬台国論争と福山

② 終末期古墳の謎

③ 備後国府の謎

④ 宮氏興亡の謎

⑤ 福山築城の謎

の五項目に着目して話します。

宮氏については会長のライフワークともいえるもの。また終末期古墳については古代福山の特殊性を語るうえで見逃せない謎です。さて、どんな切り口で歴史の断片を話していただけのか楽しみです。

いつも会場が満杯になる田口会長の講座。今回も会場を一杯にしましょう。

《実施要項》

《期日》 十一月二五日（土）

《時間》 午後二時から

《会場》 福山市中央公民館

《会費》 資料代として一〇〇円程度

《講師》 田口義之

（備陽史探訪の会会長）

神楽月、墓塚野辺をひた歩く

―高梁川右岸の石造物を味わう旅―

十一月の二十周年特別企画は、古代の祭祀跡と中世の石造物を歩いて味わう旅です。歩く距離は少々長いですが、頑張つて参加して下さい。

《主な探訪予定地》

▼石量神社：総社市秦にある式内社。古代祭祀の名残で本殿はなく、拜殿のみ。御神体は高梁川の水面から垂直に屹立する約五〇mの巨岩。

▼秦原庵寺（秦庵寺）跡：岡山県指定史跡。総社市秦にある岡山県最古の古代寺院跡。出土瓦から飛鳥期の創建とみられている。

▼山崎磨崖仏：県指定重要文化財。総社市下原にある中世の石仏七体。高梁川に臨む断崖に築かれている。

▼伊予部山墳墓群：伊予部山の東峰にある弥生時代から古墳時代にかけての有名な墳墓群。近くに巨石群（八畳岩）があり、土師器などが出土しているのでここは祭祀遺跡の可能性もある。

▼伊予部山城：松田氏の鬼身山城を攻撃する際に小早川隆景が築いた築いた山城。典型的な陣城で、伊予部山の西側の峰にある。

▼堂応寺宝篋印塔：国指定重要文化財。真備町堂応寺薬師堂付近に立つ中世の巨大な石塔。総高三二六cm。花崗岩製。基礎西面に正和三年（一一三四）の紀年銘がある。

▼満願寺宝篋印塔：県指定重要文化財。真備町辻田の森泉寺にある中世の石塔。総高三一五cm。花崗岩製。紀年銘はないが、形式上、堂応寺宝篋印塔よりやや時代が下がるとみられている。

《実施要項》

日程 十一月二三日（祝）★雨天決行

集合時刻 午前七時四五分（厳守）

集合場所 福山駅南口（釣人の像前）＊現地集合は伯備線の豪漢駅に午前 九時二〇分です。

参加費 会員 六〇〇円

一般 八〇〇円

（傷害保険料・資料代含みます。ただし交通費は各自の負担です）

＊福山駅→豪漢駅 九五〇円

＊清音駅→福山駅 八二〇円

募集人数 五〇名（申し込み先着順）

＊傷害保険加入と資料印刷部数の関係で必ず申し込みが必要です。

講師 平田恵彦さん（事務局長）

申し込み 事務局に電話で

受付開始日 十月二十四日（火）から

その他 弁当と飲料は持参。歩きやすい服装・靴でご参加下さい。歩く距離は約一三kmです。福山駅帰着予定時刻は午後五時七分です。

事務局日誌

八月二十六日(土) 午後二時。第八回

郷土史講座「歴史を語る古代エジプト遺跡」。講師は三好勝芳さん。

参加三二名。於福山市民会館。

九月二日(土) 役員会参加一五名。

九月九日(土) 午後二時「古事記」を読む」参加二〇名。

九月十六日(土) 午後七時「備後

古城記」を読む」。参加一三名。

九月十七日(日) バス例会「備前福

岡・長船の古代中世を訪ねる」。

講師は種本実さん・平田恵彦さん。

参加五一名。

九月二三日(土) 午後七時。「古墳

講座Ⅶ」参加十名。

九月三十日(土) 午後二時。第九回

郷土史講座「月の輪古墳について」

講師は山口哲晶さん。参加二八名。

ビデオ「月の輪古墳」を上映する。

十月一日(日) バス例会「秋風素漠

大富山に久代宮氏の盛衰を辿る」

講師は小林浩二さん・矢野恭平さん。

参加四二名。

十月三日(火) 役員会参加一七名。

十月七日(土) 歴史小説読書会。課

題図書井上靖著「額田女王」。

参加11名。於ふくやま市民交流館。

*とくに断りがない場合は会場はす

べて福山市中央公民館です。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

転居のお知らせ

広島県立歴史博物館企画展
近世芸備の山陽道

広島県立歴史博物館が十月二七日(金)から十一月二六日(日)まで企画展を開催します。今回お知らせしたいのは、県博には日頃からお世話になっているので会としても前売券の販売に協力することになったという事です。今後、備陽史探訪の会の行事で販売しますので会員の皆様のご協力をお願いします。また、前売券購入希望の方、知人友人に売ってくださる方、販売に協力してくださる方があれば、事務局に電話でご連絡ください。

【開催要項】

開催期間 十月二七日(金)～十一月二六日(日)

会場 広島歴史博物館企画展示室

前売り券販売価格

一般 五六〇円(七〇〇円)

高校大学 四一〇円(五二〇円)

(一)の金額は当日券の料金です。

瀬戸内海をはじめとする海上交通と連絡することで、山陽道は中国大陸や朝鮮半島と日本列島を結ぶ重要な交通路の一つに位置づけられていました。近世の山陽道(西国往還)もまた、海外交流の窓口・長崎と大坂や江戸などを繋ぐ主要路でした。

長崎奉行や大名たちの公用通行のため、西国往還沿道には宿駅をはじめとする施設や制度が整備され、旅人たちの往来に便宜を提供していました。芸備地方南部の西国往還には本陣を中心とする休泊施設や、物資輸送のための問屋場などが設けられていました。今回の展示では、こうした近世山陽道と宿駅が「広島県の歴史と文化」に果たした役割を神辺宿に伝わる資料を中心に紹介します。

会報九八号の原稿募集

会報九八号は十二月二日発送予定

原稿締切 十一月十一日(土) 必着

編集時間の都合で掲載できない場合

がありますので早めにお送りください。

原稿は一号につき一人一本に

限ります。

本文「一行一六字×一二〇行」で

ちようど一ページです。以下三二行

毎に一ページの一段になります。

四〇〇字詰原稿用紙を使用する場

合は、下四字分を空白にして、一行

一六字にして書いて下さい。皆様の

力作を期待しております。

今回は予算の都合上、二ページ以

内でお願います(依頼原稿は例

外)。皆さんの会報です。身近な話題

でもOK。どしどしお寄せ下さい。

古墳講座Ⅶ

【実施要項】

- 《座長》山口哲晶さん（部会長）
 《開催日》十月二十八日（土）
 《時間》午後七時～午後九時
 《会場》中央公民館会議室
 《会費》資料代として一〇〇円程度

『古事記』を読む

【実施要項】

- 《座長》平田恵彦さん（副部会長）
 《開催日》十一月十一日（土）
 《時間》午後二時～午後四時
 《会場》ふくやま市民交流館
 《会費》資料代として一〇〇円程度

『備後古城記』を読む

【実施要項】

- 《座長》小林浩二さん（部会長代行）
 《開催日》十一月十八日（土）
 《時間》午後七時～午後九時
 《会場》福山市中央公民館
 《会費》資料代として一〇〇円程度

歴史小説読書会

【実施要項】

- 《座長》種本実さん（部会長）
 《開催日》十二月二日（土）
 《時間》午後二時～午後四時
 《会場》福山市中央公民館（予定）
 《十二月の課題図書》
 『美貌の女帝』永井路子著
 文春文庫 四八六円

『吉備、されど吉備』を販売

古代吉備を語る会（出宮徳尚会長）がこのほど創立三十周年記念誌『吉備、されど吉備』を上梓されました。出宮先生から備陽史探訪の会の会員の皆様にも広く紹介してほしいとの要望があつて役員会で検討し、会で預かり販売することになりました。

今後会の諸行事で販売していきますのでぜひお買い求めください。
 頒布価格 二五〇〇円（税込）
 体裁 A五版 本文三三〇ページ

広島教販から書籍の販売依頼

広島教販（広島教科用図書販売株式会社）から備陽史探訪の会に書籍販売の委託がありました。売り上げ代金の一部が会の運営資金としてバックされます。もし、以下の書籍を購入されるようなことがあるならば、一般書店ではなく、備陽史探訪の会からお買い求めくださるようお願い申し上げます。

①『図説 広島県の歴史』

郷土出版社の全六巻の広島県の地域史シリーズで、十月下旬から刊行が開始されます。注目の『図説 福山・府中の歴史』は二〇〇一年（平

成十三）二月上旬に発刊予定で、ちょうど今から予約を開始します。

今年刊行されるのは『図説 備北・安芸吉田の歴史』『図説 広島市の歴史』で、それぞれ十月下旬、十二月上旬の発行予定です。

このシリーズは、予約すると予約特価で一巻九五〇〇円（税別）で販売されます。刊行後は定価の一〇〇〇円（税別）になつてしまうので、予約購入したほうが絶対にお得です。六巻全部でなく、一巻だけでも予約OKなので、気になる地域を選んで購入するのもいいと思います。

②平凡社版『広島県の歴史』

これは歴史好きの人ならば、購入すべき定番ともいえる事典です。地名は歴史を映す鏡とよくいわれますが、この言葉を体現している事典です。今回は、定価二四三〇〇円（税別）のものにサービスとして中国地方五県の旧陸軍測量地図がついてきます。この地図はなかなか手に入らないのでそれだけでも十分価値があります。詳しくは同封パンフレットを参照してください。

なお、定価については、会のバックを少なくして会員に還元することも考えていますので、これについては電話で問い合わせてください。

秋の古墳めぐり近づく

岡山県の東を流れる吉井川上流の町、柵原町。ここに全国的に有名な古墳がある。戦後間もない昭和28年、研究者と町民あがての発掘調査が行われた直径約六〇mの大円墳「月の輪古墳」がそれである。二〇周年の記念となる本年、伝説ともなっているこの古墳に登ります。十月十八日現在二十五名しか集まっています。ふるって参加して下さい。

《日時》十一月五日（日）

《集合場所》福山駅北口

《集合時間》午前八時十五分

《見学場所》

・月の輪古墳

・月の輪古墳資料館

・柵原ふれあい鉱山公園など

《参加費》四五〇〇円

《講師》網本善光

（古墳研究部会副部会長）

【編集後記】

今回は原稿の集まりが遅く、当初は少々あったため連続で掲載した原稿もありますがご了承ください。今月は当会の二〇周年記念式典があります。会員みなで大いに盛り上げましょう。（露雪君）

備陽史探訪の会事務局 ☎〇六四

福山市多治米町五一一九一八

☎〇八四九（五三六一五七